様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2014～2016
課題番号：２６５８０１２６

研究課題名（和文）グローバル化の中の1920，30年代日本医学の台湾への拡大とその影響

研究課題名（英文）academic globalism of medical science from japan to taiwan between wars

研究代表者
朝治　啓三（ASAJI, keizo）

関西大学・文学部・教授

研究者番号：７０１５１０２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：　世界水準の医学研究が周辺世界へと波及していく際の日本と台湾の違いを実証し、先進国からの研究者受け入れと、先進国への留学生派遣が齎す学の進化の効果について考察した。1945年以後日本医学は世界の中で独自の研究中心地たり得ている。
1895年以後日本が植民地台湾へ、当時の最先進水準であったがドイツ由来の医学を導入した結果、1930年代には台湾にも独自の医学が台湾人の手で育成される可能性が生まれた。しかし大戦後本土から来台した国民党政権はこの動きを見せた杜聰明らの研究意欲を封じ、台湾医学のアメリカ化を進め、その結果台湾人医学者が台湾独自の医学を打ち立てる可能性は、1950年以後には薄れた。

研究成果の概要（英文）：The present research project have researched the globalization of medical research between the Wars. As a result the two different patterns of academism can be recognized in the cases of Japan and Taiwan after 1945.
After Meiji Restration the Japanese Government introduced German medicine through German doctors. Many Japanese medical students learned in Germany and were granted degree there. Through them Japanese medical level reached the global standard by the end of World Warr II. After 1895 Japanese government despatched Japanese doctors to Taiwan and established Taipei Imperial University in Taiwan. Tung-Ming Tu, one of the graduates of the University, aspiring to establish the original medicine of taiwan, suffered a setback in establishing a new pharmanological research institute in the newly established Taiwan University. Since then Americanization of Taiwan medicine has been enhanced by its government.

研究分野：イングランド中世国制史、国際関係史

キーワード：杜聰明　台北帝国大学　国立台湾大学医学院　ドイツ医学　傅斯年　美国在華医薬促進局　ミュンヘン大学医学部　東京帝国大学医学部

１．研究開始当初の背景

購入されてから約100年間大阪府立中央図書館の書庫で眠っていた「住友文庫のドイツ学位論文」のうち、医学関係の学位論文の目録作成に着手し、第３巻と第４巻を刊行した。学位論文の現物との照合のためにベルリン州立図書館やミュンヘン大学図書館に出張し、書庫で日本に送られた論文とそうでない論文との確認を行った。この作業を通じて、学位を取得した日本人がドイツ留学中に指導を受けたドイツ人教官の業績をも調べることができた。ドイツ医学専門知識を同志社大学の服部伸教授から得た。

Kim, *Doctors of Empire*, Toronto, 2014, や、劉士泳、*Prescribing Colonization*, Ann Arbor, 2009 には、帝国日本の植民地政策としての医療の供給という視点が強く示されている。一方バワース、金久訳『日本における西洋医学の先駆者たち』慶応大学出版会、1998 年などには、イギリス人ウィリスと、ドイツ人ベルツが日本に医学をもたらした点が強調されている。ドイツ、日本、臺灣を結んだ個々の日本人や台湾人の働きやその役割の分析が不足していると感じられた。

青山学院大学出身で、埼玉工業大学の教育学研究者である佐藤由美教授から、日本へ留学してきた台湾人、朝鮮人学者についての先行研究を教授して頂き、台湾での資料館や図書館、大学や研究施設について、詳しい情報を得た。私が学術振興会に提出した研究計画がウェッブで公開されたため、それを読んだ台湾人で中央研究院の PDF であった沈佳姍さんが、研究の補助をしたいと申し出て下さった。彼女を通じて臺北・中央研究院の臺灣史研究所副所長の劉士泳教授と研究交流することが出来、研究期間の３年間、中央研究院の図書館を利用できた。

住友文庫に含まれるドイツでの研究文献や学位論文を第１次大戦後にまとめて購入したのは、当時理化学研究所教授であった田丸節郎氏である。氏の御子息である東京大学の副学長を勤められた田丸謙二氏と連絡が取れたが、購入のいきさつは不明のままである。一方住友史料館の安国良一氏からの御教授で、住友友純男爵の購入への支援を知ることが出来た。

これらの情報が揃うと、学のグローバリズムが、歴史の中にはっきりと跡を残していることが見えてきた。ドイツに赴きベルリン大学図書館書庫で学位論文を確認すること、ミュンヘン大学で学のグローバル化の実例を確かめること、臺北帝大、高雄醫學校、国史館文献館で、臺湾總督府の臺北帝大での学問研究体制についての政策を確認することなどの課題は自動的に決まった。

２．研究の目的

帝国主義はレーニン時代には経済の概念として措定され、その後植民地主義と結びつけて把握されたため、先進国による未開発国の支配を意味し始めた。進んだ経済、政治の水準が、遅れたそれらを下属させる結果、後進国開発が進み、従属状態ではあるが、住民の生活水準は向上するという結果を 19 世紀末の世界は経験した。

学問の世界でも同様の現象が生じているのではないかとの発想で、医学分野での独日臺灣関係に目を付けた。そのとき既に始めていた『住友文庫ドイツ医学学位論文目録』作成の過程で、日本人医学者が多くいること、その中には世界水準の業績を残した人物もいることに気づいたからである。学の移植についての先行研究が、学者の数や、個人業績の称賛に終わっている状況に飽足りず、学の質が持つ世界史的意義を解明するには、具体例により実証が必要であるとの認識に立って、医学分野での独日臺の移植過程の実証を目的とした。

３．研究の方法

学の移植を実証するには、お雇い外国人のように、先進国から後進国への学者の派遣とその地での学の教授をサーベイする必要がある。日本と臺灣に関しては、これはすでに先行研究によって終えられている。次は後進国から先進国への留学生の派遣を網羅的に調査することだが、統計的な調査は、日独、臺日については先行研究がある。未開拓なのは学の中身の移植についての研究である。日本からドイツへ留学し学位を取得した医学者の大半は、私費留学で、帰国後開業医となった。これは臺灣から日本への留学生についてもいえる。そこで、本研究では学の移植を学問水準や研究方法、医学の社会的位置づけの視角から行うことにした。

ドイツではコッホらの細菌説と、フィルヒョウらの環境状況説とが対立し、その過程で多くの学者が組織的に動員され、研究の精密化が進んだ。一方アメリカではほぼ在野の医師によってウィルスが発見された。学問を生み出す環境の原理的な違いが読み取れる。学問的後進状態の日本医学界は、主としてドイツ方式を優先し、個々の医学者は留学先でドイツ式研究方法を身に着けて帰国した。帝大醫学部と医専でその成果を教授し、学術論文を発表して、学界水準を向上させた。これらの論文タイトルを、ドイツでの指導者の論文と比較する方法で、学の移植、特に研究水準

の移植を実証する方法を採った。
　医学者の同窓会誌での懐旧談は、彼らの意欲を知る良き資料として利用できた。経済的搾取や政治支配のためという意図は見られず、学の向上を目指す心情が読み取れる。臺灣人医学者が日本人教授を尊敬している例も見られた。

４．研究成果
(1)本研究以前の研究状態
　1920, 30 年代日本政府による臺灣に対する植民地政策の中での、医学と医療の臺灣への導入は、衛生状態の改善、生産地帯としての基盤づくり、熱帯病研究の実験地化といった政治面での合目的性とその有効性を、第一の視角として研究されてきた。
　医学教育史分野では、日本から赴任したドイツ帰りの医学者たちが、臺灣の実情を踏まえてというよりも、政府の方針に合致する医学教育と医療を現地人に対して施す教育を行ったという認識が前提とされた研究が支配的であった。
　日本人と臺灣人の交流史という分野では、接し方が抑圧的ではなく、親和的であり、現地人も次第に日本の文化水準に合わせ、それをよしとする価値観を持つようになって行った、という思い込みが、前提とされた結論がみられた。
　ドイツから日本への医学の移植は、明治初期にはお雇い外国人を通じて、受け身的に導入され、やがて能力を向上させた日本人がドイツへ留学して学位を取得し、その結果、北里、志賀といった世界水準の医学者を生むまでになったという、日本人の研究能力の持ち前の高さを暗に自慢するサクセス・ストーリーとして叙述されてきた。ドイツ留学は個人ごとに目的も成果も異なっていたが、従来の研究では概括的に進んだ文化の導入として扱われ、誰が何をいつどのように移植したのかを解明するという研究姿勢は見られない。
　日本や台湾における医学研究、教育のための制度や設備作りはよく研究されているが、何が移植されたのか、それは何故かは問われては来なかった。
(2)解明課題とその成果
①日本人医学者がドイツからいかなるやり方で、何を日本へもたらしたのかを解明課題とし、ドイツで取得した学位に繋がった彼らの研究テーマからそれを判断するという方法を採った。
　大阪府立中央図書館の書庫に眠っていた住友文庫に含まれるドイツの大学に提出された学位論文のうち、1917 年以前の医学学位論文の全てについて、書誌情報をデータ化してエクセルファイルで入力し終えた。それをもとに「学位論文目録」第 1，2 巻として、関西大学大阪都市遺産研究センターから刊行した。これによって、明治大正期に日本人がドイツの大学で最先進の医学研究成果を受け取り、ドイツの研究方法を身に着けて帰国し、日本の大学で後進の育成に当たり、独自性を加えた学術論文を日本語、ドイツ語で発表して、東アジアでは最先進の水準を達成したことが判明した。本研究開始後ベルリン州立図書館に赴いて、書庫内調査を許可された結果、ドイツに残る学位論文と住友文庫内の論文との照合を行うことができ、第 3，4 巻を刊行し得た。
　この目録に含まれるミュンヘン大学については、学位を取得した日本人医学者全てについての網羅的研究を行い、その結果を論文にして、『関西大学文学論集』に掲載した。特に留学中の日本人を指導したドイツ人医学者の研究業績と日本人の学位論文を比較して、学問水準の移植の経過を確認した。同じ作業をヴュルツブルク大学についても行っており、プロソポグラフィカルな実証研究科可能であり、成果を公表することが出来る。
②日本に移植されたドイツ医学がいかにして臺灣へ移植されたのかを解明する。日本で医学学位を取得した臺灣人留学生の学位論文を網羅的に調査し、データベース化し、開業して医療に携わった人と、研究機関に所属して、臺灣独自の医学研究の構築を目指した人とに分けて、個別に検討した。その際、日本から臺灣への医学の水準の移植が行われたか否かの検討を重視した。
　日本の大学へ留学した臺灣人医学者を網羅的に調べた結果、そのうち、戦前の台湾で唯一臺北帝大醫学部教授となった杜聰明について注目した。戦後の台湾で彼が独自の薬学研究センターを設立しようとした過程と、それを挫折させた国民党政府との、学問研究の社会的意義についての見解の相違を見出し、ドイツ医学の水準が臺灣には移植されなかったことを、論文（『史泉』126 号）において結論した。
　その結果、第 2 次大戦後の臺灣では、世界の医学水準を後追いする形での「先進化」が第一とみなされ、臺灣人独自の世界に先駆けた研究分野の創設は敬遠された。杜聰明は熱帯病やマラリア、蛇毒に関する研究では臺灣人が世界水準で研究し得ると見做して、台北を離れ、高雄医学院で後進指導をしたが、その地では後継者を作りえなかった。台北で育てた李鎮源が臺灣大学藥学院で独自の研究を発表するにとどまっている。
　ノーベル医学生理学賞を日本人が取得す

る土台は、学の水準及び研究方法の移植が決め手であることを、日本と臺灣の比較から識別することができる。

(3)医学のグローバル化についての研究視角の提案

20 世紀前半の醫学の質のグローバル化を実証した。同時に移植のされ方が日本と臺灣とで異なり、独自の研究中心を築き得た日本医学界と、医学者が個別にアメリカ学界に取り込まれて独自の学問水準を国単位では達成しなかった臺灣医学界との違いを実証し得たと考えている。

従来、医学者による類似のテーマでの研究は非常に専門化しており、他分野の研究者には立ち入ることができないほどであった。理解困難のもとは、専門用語や概念だけでなく、素人にはわかるまいがという説明者の姿勢が、読者を遠ざけていた。専門知識や医療技術の実践があれば理解しやすいであろうが、医学を含めてあらゆる学問は、知識や技術に終わるものでは無いはずであろう。

ドイツから日本に伝わったものは、ドイツ医学の中の全てではなく、すぐに改良され得る技術でもなく、最先進の学問研究能力であろう。それがあれば異なる地の異なる民族でも、努力すれば独自の研究を行い、世界水準の成果を生み出し得るであろう。今回の論文では、ドイツで学位を取得した多くの日本人と、日本でドイツ医学の質を獲得した杜聰明を含む少数の臺灣医学者の経験を、医学者ではない者の立場で見ることによって、技術移転史に終わらない、医学史を描き得たと考えている。

経済のグローバル化は資本力の高い方から低い方へ広がった。政治分野では軍事力の強さが決め手であった。学問では、高い研究水準を維持向上させる研究意欲の強さ、そしてそれを尊重する社会的支援の在り方が決め手となった。前二者のグローバリズムは現体制を維持することが波及元の国の目的であるが、学問のグローバリズムは、波及先の社会の困難を乗り越えるよう、研究を前進させることが目的であるため、絶えず革新的であり、各国学界は相互に競争的で、最高水準の国は歴史的には固定されるとは限らない。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　4 件）

①朝治啓三「樂學至上、研究第一　杜聰明が目指したもの」『史泉』126 号(印刷中)、査読有

②朝治啓三「『住友文庫ドイツ医学学位論文目録』の刊行」『住友資料館叢書月報』31 号、2016 年 12 月、1-3 頁、査読無

③朝治啓三「『住友文庫ドイツ医学学位論文目録』の編纂」『西洋史読書会だより』57 号、2016 年 11 月、1-3 頁、査読無

④朝治啓三「世紀転換期ミュンヘン大学で医学学を取得した日本人医学者」『関西大学文学論集』66-3，2016 年 9 月、51-78 頁、査読無

〔学会発表〕（計　0 件）

〔図書〕（計　2 件）

朝治啓三編『住友文庫ドイツ医学学位論文目録』第 3、4 巻　関西大学大阪都市遺産研究―センター、2014-15 年、総 479 頁、総 403 頁　査読無

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~asajik/

６．研究組織

(1)研究代表者

朝治　啓三（ASAJI, Keizo）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：70151024

(2)研究分担者

なし　　（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
なし　　（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
服部伸（HATTORI，Osamu）
佐藤由美(SATO, Yumi)
沈佳姍(SAN, Shen)
劉士泳(LIU, Mike)
安国良一(YASUKUNI, Ryoichi)